

A 型 Gauss-Manin 方程式系

慶応大 理工 石浦信三

上智大 理工 野海正俊

$F(x, t) = x^{\ell} + t_2 x^{\ell-2} + \dots + t_{\ell}$ ($t = (t_2, \dots, t_{\ell})$) を $A_{\ell-1}$ 型孤立特異点をもつ多項式 x^{ℓ} の versal な変形とし, δ 函数の積分 $u = \int \delta(F) dx$ の満たす micro 微分方程式系 — $A_{\ell-1}$ 型 Gauss-Manin 方程式系を考察する。我々は, K. Saito, T. Yano, J. Sekiguchi [5] により導入された flat coordinate system を用いて, その explicit な表示を与える。第 1 節で, Gauss-Manin 系の構造論を準備したのち, 第 2 節では, A 型 flat coordinate system の背後にある分数巾の構造を独立に定式化する。第 3 節で, 前 2 節の結果を総合して, A 型 Gauss-Manin 系の幾つかの表示を与えることにする。ここでは述べられなかったが, 第 2 節の結果を適用して, A 型 Gauss-Manin 系の“母函数表示”を構成することができる。これについては, S. Ishiura, M. Noumi [1] を参照されたい。

第1節 Gauss-Manin系の構造

□1. 普遍開折の Gauss-Manin系. 原点を孤立特異点とする正則函数の芽 $f: X_0 = (\mathbb{C}^{n+1}, 0) \rightarrow S_0 = (\mathbb{C}, 0)$ の, 基底 $T = (\mathbb{C}^{m-1}, 0)$ 上の開折 (unfolding) φ は, 可換図式

$$(1.1) \quad \begin{array}{ccc} X_0 \hookrightarrow X = X_0 \times T & \xrightarrow{p} & T \\ f \downarrow & \downarrow \varphi & \nearrow q \\ S_0 \hookrightarrow S = S_0 \times T & & \end{array} \quad p, q \text{ は標準射影.}$$

で, f が φ の埋め込み $S_0 \hookrightarrow S$ による引き戻しになるものとして定義される。ここで, X_0 の座標を $x = (x_0, \dots, x_n)$, S_0 の座標を t_1 , T の座標を $t' = (t_2, \dots, t_m)$ とし, 埋め込み写像 $X_0 \hookrightarrow X$, $S_0 \hookrightarrow S$ は, $t'_1 = 0$ で定められるものとする。ファイバー積 $Z = X \times_S T$ を考えれば, 図式

$$(1.2) \quad \begin{array}{ccc} Z & \xrightarrow{q'} & X \\ p' \downarrow & \swarrow \varphi & \downarrow p \\ S & \xrightarrow{q} & T \end{array}$$

を得る。 φ の t_1 -成分を $F_1 = F_1(x, t')$ と書くと, $F_1|_{t'_1=0} = f$ となり, F_1 は f のパラメータ t' についての変形と見做すことができる。

$$(1.3) \quad F = t_1 - F_1$$

とおく。開折 φ (あるいは, 変形 F) が 普遍 (versal) だと

いふのを、次の *infinitesimally versal* の条件で定義する：

$$(1.5) \quad \left\{ \begin{array}{l} \text{偏導函数 } \partial_{t_k}(F) \Big|_{t=0} \quad (k=1, \dots, m) \text{ が剰余環} \\ \mathcal{O}_{x_0} / (\partial_{x_0}(f), \dots, \partial_{x_n}(f)) \text{ の } \mathbb{C}\text{-線型空間としての} \\ \text{基底をなす。*)} \end{array} \right.$$

以下、普遍開折 φ について議論をすすめる。 X 上の $(n+1)$ -
 相対微分形式の \mathcal{O}_X -加群 $\Omega_{X/\mathbb{T}}^{n+1}$ について $\Omega_F = \Omega_{X/\mathbb{T}}^{n+1} / dF \wedge \Omega_{X/\mathbb{T}}^n$
 とおく。 Ω_F の台を、 C と書いて、 F の critical subset と呼ぶ。
 偏導函数 $\partial_{x_0}(F), \dots, \partial_{x_n}(F)$ の生成する \mathcal{O}_X の ideal を I_C とすれば、
 $\mathcal{O}_C = \mathcal{O}_X / I_C$ で、 C は X の部分多様体になっている。一方、
 S 上の正則ベクトル場のなす \mathcal{O}_S -加群 Der_S について、部分
 Lie 環 $\mathfrak{g} = \{ \theta \in \text{Der}_S; [D_t, \theta] = 0 \}$ と考える。条件 (1.5) は
 Weierstrass の準備定理を用いて、次の定理に言い換えられる。

定理 1. 写像 $\theta \in \mathfrak{g} \mapsto \theta(F) \in \mathcal{O}_X$ は、 $\mathcal{O}_{\mathbb{T}}$ -同型写像

$$(1.6) \quad \mathfrak{g} \xrightarrow{\sim} \mathcal{O}_C \quad (\xrightarrow{\sim} \Omega_F, \cdot dx_0 \wedge \dots \wedge dx_n)$$

を誘導する。とくに、 Ω_F, \mathcal{O}_C は、 $\mathcal{O}_{\mathbb{T}}$ 上階数 m の自由加群
 である。

この定理の系として、 $\varphi|_C : C \rightarrow S$ は、有限になり、 C の
 φ による像として、 F の discriminant D が定まる。 D は、
 S の被約かつ既約な超曲面である。

普遍開折 $\varphi : X \rightarrow S$ の Gauss-Manin 系を次の様に定める。

*) 以下、層の記号 $\mathcal{O}_x, \Omega_{X/\mathbb{T}}$ 等で原点での stalk を表わす。

$\varphi|_C$ の有限性から, φ (resp. p') は, $T^*S = T^*S - T_S^*S$ 上,
 T^*X 上の De Rham 系 \mathcal{O}_X (resp. T^*Z 上の $F=0$ に台をもつ代
 数的 micro 函数の系 $\mathcal{E}_{[F]} = \mathcal{E}_Z \delta(F)$) に関して 非特性的で
 ある。即ち, $\lambda = (0, dt_1) \in T^*S$ の近傍で, 標準写像
 $T^*X \xleftarrow{p} X \times_S T^*S \xrightarrow{\varpi} T^*S$ (resp. $T^*Z \xleftarrow{p'} Z \times_S T^*S \xrightarrow{\varpi'} T^*S$) によ
 り

$$(1.7) \quad \varpi|_{\rho^{-1}(T_x^*X)} : \rho^{-1}(T_x^*X) \rightarrow T^*S$$

$$\text{(resp. } \varpi'|_{\rho'^{-1}(T_{\{F=0\}}^*Z)} : \rho'^{-1}(T_{\{F=0\}}^*Z) \rightarrow T^*S)$$

が有限になる。そこで, micro 微分作用素環上の加群
 category での 直像

$$(1.8) \quad H_F = \int_{\varphi} \mathcal{O}_X (= \varpi_* (\mathcal{E}_{S \leftarrow X} \otimes_{\pi^{-1}(\mathcal{O}_X)} \pi^{-1}(\mathcal{O}_X))) \\ = \int_{p'} \mathcal{E}_{[F]} = H^{m+1}(\varpi'_* \rho'^{-1} DR_{Z/S}(\mathcal{E}_{[F]}))$$

が, λ の近傍で定義できる。 H_F を開折 φ (または変形 F) の
Gauss-Manin 系 といふ。 H_F は, \mathcal{E}_S 上 canonical な生成元 u
 $= \int \delta(F) dx_0 \wedge \dots \wedge dx_n$ ($\delta(F) dx_0 \wedge \dots \wedge dx_n \in \Omega_{Z/S}^{m+1} \otimes \mathcal{E}_{[F]}$ のコホモロ
 ジー類) をもつ, simple holonomic system で, $H_F^{(k)} = \mathcal{E}_S^{(k)} u$
 $(k \in \mathbb{Z})$ が, その good filtration になる*) (詳しくは, F.
 Pham [2] を参照。) このとき, φ の普遍性は, 次のシンボ
 ルについての定理に言い換えられる。

*) 層の記号 H_F, \mathcal{E}_S で $\lambda \in T^*S$ での stalk を表わす。

定理 2. 写像 $\theta \in \mathcal{Q} \mapsto \theta D_{t_1}^{-1} u \in H_F^{(0)}$ は, \mathcal{O}_T -同型写像

$$(1.9) \quad \mathcal{Q} \xrightarrow{\sim} H_F^{(0)} / H_F^{(-1)}$$

を誘導する。とくに, $H_F^{(0)} / H_F^{(-1)}$ は, \mathcal{O}_T 上階数 m の自由加群である。

定理 1, 2 をあわせて

$$(1.10) \quad \begin{array}{ccc} & \mathcal{Q} & \\ \swarrow & & \searrow \\ H_F^{(0)} / H_F^{(-1)} & \xrightarrow{\sim} & \Omega_F \end{array}$$

という, 3つの \mathcal{O}_T -加群の同型が, 成立するのである。定理 2 の同型を, $H_F^{(0)}$ にもち上げることを考える。シンボル $H_F^{(0)} / H_F^{(-1)}$ が \mathcal{O}_T 上, 階数 m の自由加群ということから, micro 微分作用素の準備定理により, H_F (resp. $H_F^{(0)}$) は, \mathcal{E}_S の可換部分環 $\mathcal{O}_T \llbracket D_{t_1}^{-1} \rrbracket \llbracket [D_{t_1}] \rrbracket$ (resp. $\mathcal{O}_T \llbracket D_{t_1}^{-1} \rrbracket$) の上に, 階数 m の自由加群になることが従う。しかも定理 2 により,

$$(1.11) \quad D_{t_k} D_{t_1}^{-1} u \quad (k=1, \dots, m)$$

は, その自由基底を与える。いま, $\mathcal{Q} \otimes_{\mathcal{O}_T} \mathcal{O}_T \llbracket D_{t_1}^{-1} \rrbracket$ の $\mathcal{O}_T \llbracket D_{t_1}^{-1} \rrbracket$ -部分加群 $\tilde{\mathcal{Q}} = \mathcal{Q} D_{t_1}^{-1} \llbracket D_{t_1}^{-1} \rrbracket$ を考よう。 $\tilde{\mathcal{Q}}$ の元 P は

$$(1.12) \quad P = \sum_{i=0}^{\infty} \theta_i D_{t_1}^{-i-1} \quad (\theta_i \in \mathcal{Q})$$

という表示をもつものである。

定理 3. 写像 $P \in \tilde{\mathcal{Q}} \mapsto Pu \in H_F^{(0)}$ は, $\mathcal{O}_T \llbracket D_{t_1}^{-1} \rrbracket$ -左加群としての同型

$$(1.13) \quad \tilde{\mathcal{Q}} \xrightarrow{\sim} H_F^{(0)}$$

を与え、そのシンボルをとると同型 (1.9) が得られる。

こうして得られた同型写像 (1.13) が、普遍開折の Gauss-Manin 系の構造を、完全に記述する。

□ 2. Flat な座標系と、対数的ベクトル場. 同型写像

$\tilde{q} \cong H_F^{(0)}$ を通して、 q 上に幾つかの演算を導入する。自己準同型写像 $A_k \in \text{End}_{\mathcal{O}_T}(q)$, 双線型写像 $B_k \in \text{Hom}_{\mathcal{O}}(q, q; q)$ ($k \in \mathbb{N}$) を次の様に定める。 $\theta, \theta' \in q$ とし、

$$(2.1) \quad \begin{cases} t_1 \theta D_{t_1}^{-1} u = \sum_{i=0}^{\infty} A_i(\theta) D_{t_1}^{-i-1} u \\ \theta \theta' D_{t_1}^{-2} u = \sum_{i=0}^{\infty} B_i(\theta, \theta') D_{t_1}^{-i-1} u \end{cases}$$

とおくのである。 $A_0(\theta), A_1(\theta)$ を他の A_k ($k \geq 2$) と区別して、 $t_1 * \theta, N(\theta)$ と書く。 $\text{Ders} = \mathcal{O}_S \otimes_{\mathcal{O}_T} q$ により、 Ders の \mathcal{O}_S -自己準同型写像

$$(2.2) \quad \begin{cases} t_1 * : \text{Ders} \rightarrow \text{Ders} \\ N : \text{Ders} \rightarrow \text{Ders} \end{cases}$$

に係数拡大する。同様に、 $B_0(\theta, \theta'), B_1(\theta, \theta')$ を他の B_k ($k \geq 2$) と区別して、 $\theta * \theta', \nabla_{\theta}(\theta')$ と書くことにする。 * については q は \mathcal{O}_T -可換環になり、 $\nabla : q \times q \rightarrow q$ については $a \in \mathcal{O}_T, \theta, \theta' \in q$ とし、

$$(2.3) \quad \begin{cases} 0) \nabla_{a\theta}(\theta') = a \nabla_{\theta}(\theta') \\ 1) \nabla_{\theta}(a\theta') = \theta(a) \theta' + a \nabla_{\theta}(\theta') \\ 2) \nabla_{\theta}(\theta') - \nabla_{\theta'}(\theta) = [\theta, \theta'] \end{cases}$$

という性質が確かめられる。 $\mathcal{D}_{\text{ens}} = \mathcal{O}_S \otimes_{\mathcal{O}_T} \mathcal{G}$ により、係数拡大して、* について \mathcal{D}_{ens} は \mathcal{O}_S -可換環、 $\nabla : \mathcal{D}_{\text{ens}} \times \mathcal{D}_{\text{ens}} \rightarrow \mathcal{D}_{\text{ens}}$ は、torsion free な接続 (connection) になる。しかも、 D_{t_1} は、 \mathcal{D}_{ens} の単位元であり、 $\nabla_{\theta}(D_{t_1}) = 0$ ($\theta \in \mathcal{D}_{\text{ens}}$) が成り立つ。このとき、次の compatibility が成り立つ。

命題 1. $\text{End}_{\mathbb{C}}(\mathcal{D}_{\text{ens}})$ における関係式として

$$(2.4) \quad \begin{aligned} 1) & \quad [\nabla_{\theta_1}, \theta_2 *] - [\nabla_{\theta_2}, \theta_1 *] = [\theta_1, \theta_2] * \\ 2) & \quad [\nabla_{\theta}, t_1 *] + [\theta *, N] = \theta(t_1) - \theta * \end{aligned}$$

ここで、 $\theta, \theta_1, \theta_2 \in \mathcal{D}_{\text{ens}}$.

接続 ∇ を導入することにより、flat な座標系という概念を明確にすることが出来る。その基礎となるのは次の命題である。

命題 2. i) $B_2(\theta, \theta') = 0$ ($\theta, \theta' \in \mathcal{G}$) であれば、 ∇ は \mathcal{D}_{ens} 上の積分可能な接続である。即ち

$$(2.5) \quad [\nabla_{\theta}, \nabla_{\theta'}] = \nabla_{[\theta, \theta']} \quad (\theta, \theta' \in \mathcal{D}_{\text{ens}}).$$

ii) さらに、 $A_2(\theta) = 0$ ($\theta \in \mathcal{G}$) であれば、

$$(2.6) \quad [\nabla_{\theta}, N] = 0 \quad (\theta \in \mathcal{D}_{\text{ens}})$$

が成り立つ。

∇ が積分可能であれば、 \mathcal{D}_{ens} の ∇ に関する horizontal subspace $V = \{ \theta \in \mathcal{D}_{\text{ens}} ; \nabla_{\theta'}(\theta) = 0 \text{ } (\theta' \in \mathcal{D}_{\text{ens}}) \}$ は、 \mathcal{G} に含まれる m 次元 \mathbb{C} -線型空間になる。 ∇ は torsion free なのて、

$[V, V] = 0$ となり、 \mathcal{O}_S の座標系 $y = (y_1, \dots, y_m)$ で $V = \bigoplus_{i=1}^m \mathbb{C} D_{y_i}$ を満たすものが、 \mathbb{C} 上の線型変換を除いて一意に決まる。このような座標系を、flat な座標系 という。(K. Saito [3], [4] を参照。)

次に、 \mathcal{O}_S -準同型写像 $W \in \text{End}_{\mathcal{O}_S}(\mathcal{D}_{\text{ens}})$ を、

$$(2.7) \quad W(\theta) = t_1 \theta - t_1 * \theta \quad (\theta \in \mathcal{D}_{\text{ens}})$$

を導入する。 $\Delta := \det(W)$ は、discriminant D の定義方程式を与える。ベクトル場 $\theta \in \mathcal{D}_{\text{ens}}$ は、 $\theta(\Delta) \in \mathcal{O}_S \Delta$ となるときに、 D に沿って対数的である といい、その全体を $\mathcal{D}_{\text{ens}}(\log D)$ と記す。

このとき、 W が、 \mathcal{D}_{ens} から $\mathcal{D}_{\text{ens}}(\log D)$ の上への \mathcal{O}_S -同型を与えることを見よう。

そのために、 $\text{End}_{\mathcal{O}_S}(\mathcal{D}_{\text{ens}})$ 上の接続 ∇ を

$$(2.8) \quad \nabla_{\theta}(v) = [\nabla_{\theta}, v] \quad (\theta \in \mathcal{D}_{\text{ens}}, v \in \text{End}_{\mathcal{O}_S}(\mathcal{D}_{\text{ens}}))$$

で定めておくことにする。

命題 3. $\text{End}_{\mathcal{O}_S}(\mathcal{D}_{\text{ens}})$ における関係式として

$$1) \quad [W, \theta^*] = 0$$

$$(2.9) \quad 2) \quad \nabla_{\theta}(W) = [\theta^*, N] + \theta^*$$

$$3) \quad \nabla_{W(\theta)}(W) = W \circ \nabla_{\theta}(W) + [W, N \circ \theta^*]$$

が成り立つ。ここで $\theta \in \mathcal{D}_{\text{ens}}$ である。

以上の定式化の下に、次の定理を示すことができる。

定理 4. W と Δ について

$$(2.10) \quad W(\theta)(\Delta) = \theta(\text{tr}(W))\Delta \quad (\theta \in \text{Dens})$$

とくに, W は, Dens から $\text{Dens}(\log D)$ の上への同型写像である。

付記 f が重みつき斉次多項式るときには, $H_F^{(0)}$ が \mathcal{O}_S 上階数 m の自由加群となることが知られる。そのときには, 写像 $\theta \in \text{Dens} \mapsto \theta D_{t_i}^{-1} u \in H_F^{(0)}$ が \mathcal{O}_S -同型になるので, $W(\theta) D_{t_i}^{-1} u \in H_F^{(-1)}$ ($\theta \in \text{Dens}$) から, 図式

$$\begin{array}{ccc} \text{Dens}(\log D) & \rightarrow & \text{Dens} \\ \downarrow & & \downarrow S \\ H_F^{(-1)} & \rightarrow & H_F^{(0)} \end{array}$$

が可換になり, 写像 $\theta \in \text{Dens}(\log D) \mapsto \theta D_{t_i}^{-1} u \in H_F^{(-1)}$ も \mathcal{O}_S -同型になる。このことは, Gauss-Manin 系 H_F と, discriminant の中 Δ^S の満す方程式系の構造上の類似を示唆している。

付記 2. □2 で展開した議論は, $\lambda = (0, dt_i) \in T^*S$ の近傍で定義され, シンボルが \mathcal{G} と \mathcal{O}_T -同型であるような一般の simple holonomic system に対して有効である。

第2節. 分数巾の構造と Duality

この節では, A型 Gauss-Manin系 の flat coordinate system と flat basis の背後にある分数巾の構造を, "F-系列" "E-系列" という概念で抽象し, 系統的に論ずる。論理的には, 他の節とは独立である。

□ 0. 環 $k((x^{-1}))$ と residue. 単位元 1 を持つ可換環 k に不定元 x を添加して巾級数環 $R := k((x^{-1})) =: k[[x^{-1}]](x)$ を考える。 R は, 巾級数

$$(0.1) \quad \varphi(x) = \sum_{i=0}^{\infty} \varphi_i x^{m-i} \quad (\varphi_i \in k, m \in \mathbb{Z})$$

の全体で, 表示 (0.1) で $\varphi_0 \neq 0$ のとき m を φ の次数といて $m = \deg(\varphi)$ とかく。特に, $\varphi_0 = 1$ のとき φ は monic であるという。次数に関するフィルタは

$$(0.2) \quad (R(m))_{m \in \mathbb{Z}} \quad R(m) = k[[x^{-1}]] x^m$$

に与る。 R は分譲かつ完備な位相環である。従って, φ が monic のとき, $\forall q \in \mathbb{Z} (q \geq 0, q \mid \deg(\varphi))$ について, $\psi^q = \varphi^q$ とおける monic の $\psi \in R$ が一通りに来る。 $\psi = \varphi^{\frac{p}{q}}$ とかく。微分形式の R -加群 $\Omega_{R/k}^1 (= R dx)$ 上の residue symbol $\text{Res}_{R/k}$ がこの性質で一意的に定まる。(表示 (0.1) がいえば, $\text{Res}_{R/k}(\varphi dx)$ は, x^{-1} の係数 φ_{m+1} に他ならない。)

- (0.3) R0) $\text{Res}_{R/k} : \Omega_{R/k}^1 \rightarrow k$ は k -線同型
 R1) $\text{Res}_{R/k}(d\varphi) = 0$ ($\varphi \in R$)
 R2) $\text{Res}_{R/k}(\varphi^{-1}d\varphi) = \text{deg}(\varphi)$ ($\varphi \in R^* = R$ の可逆元全体)

この residue については、次の Cauchy 積分表示が成り立つ。
 $\varphi \in R^*$ とし、

$$(0.4) \quad \varphi(x)_+ = \text{Res}_{R((\xi^{-1}))} \left(\frac{\varphi(\xi)d\xi}{\xi-x} \right) \quad (\varphi \in R)$$

すなわち、 $\varphi(x)_+$ は、展開 (0.1) の x に因る多項式部分 $\sum_{i=0}^m \varphi_i x^{m-i}$ である。

□ 1. Σ -系列と Duality. $e \in A =: k[x]$ は n 次 k の monic

な多項式である。 $a, b \in A$ とし、

$$(1.1) \quad \langle a, b \rangle =: \text{Res}_{R/k} \left(\frac{ab dx}{e} \right) \in k$$

と定め、 $\langle \rangle$ は $B =: A/Ae$ 上の perfect pairing $\langle \rangle : B \times B \rightarrow k$ を誘導する。この双対性に着目し、 B の "自己双対的" な k -基底を構成するに考えよう。 k -加群として

と同型 $A(n-1) = A \cap R(n-1) \cong B^n$ 、 $A(n-1)$ と B とを同

視し、 $e_i \in A(n-1)$ 、 $\text{deg}(e_i) = i$ ($i=0, \dots, n-1$) が、

B の k -基底を成すものとする。 $e_i^* \in A(n-1)$ ($i=0, \dots,$

$n-1$) を $\langle e_i, e_j^* \rangle = \delta_{ij}$ を満たすようにと、次の等式

$$(1.2) \quad \frac{e(\xi) \cdot e(x)}{\xi-x} = \sum_{i=0}^{n-1} e_i(x) e_i^*(\xi)$$

と同等である。すなわち、 e_i は i 次係数は可逆、 e_i^* は

$(n-1-i)$ 次係数は可逆となる。したがって、 $a \in A$ の e

に 8 3 割算

(1.3) $a = q(a)e + r(a) \quad q(a) \in A, r(a) \in A(n-1)$

(7. (e_i) と 双対 (e_i^*) . residue symbol を 用い?

(1.4)
$$\begin{cases} q(a)(x) = (ae^{-1})_+(x) = \text{Res}_{\mathbb{R}/k} \frac{(a(\xi) d\xi)}{e(\xi)(\xi-x)} \\ r(a) = \sum_{i=0}^{n-1} \langle a, e_i^* \rangle e_i = \sum_{i=0}^{n-1} \text{Res}_{\mathbb{R}/k} \left(\frac{ae_i^* dx}{e} \right) e_i \end{cases}$$

と 表わせる。B の k-基底 (e_i) は、 $e_i^* = e_{n-1-i}$ と 取り

よ に 自己双対的 といふ こと に なる。 二 次 (1.2) に 8 11,

(1.5)
$$\frac{e(\xi) - e(x)}{\xi - x} = \sum_{i=0}^{n-1} e_i(x) e_{n-1-i}(\xi)$$

が 成 立 する こと と 同 等 である。 自己双対的 基底 の 概念 を、

無限 系列 に 延長 (2 次 の 定義 を 設ける。

定義 1. $A = k[x]$ の 元 の 系列 $(e_i)_{i=0}^\infty$ が、 系 の 2 条件 を 満たす、 $(e_i)_{i=0}^\infty$ は E-系列 と 呼ぶ といふ。

} $\Sigma 0)$ e_i は、 i 次 monic
 $\Sigma 1)$ $0 \leq i, j < k$ かつ $i \neq j$ ならば $\text{Res}_{\mathbb{R}/k} \left(\frac{e_i e_j}{e_k} \right) = \delta_{i, k-1-j}$
 (条件 $\Sigma 1)$ は、 A/Ae_k 上、 e_0, \dots, e_{k-1} が 自己双対的 といふ こと に 相当 する こと である。)

E-系列 $(e_i)_{i=0}^\infty$ (e_i : i 次 monic の 多項式) について、 母

函数

(1.6)
$$\Sigma(x, \lambda) = \sum_{i=0}^\infty e_i(x) \lambda^i \in A[[\lambda]]$$

を用いると、 条件 $\Sigma 1)$ は (1.5) より

(1.7)
$$\frac{\Sigma(\xi, \lambda) - \Sigma(x, \lambda)}{\xi - x} = \lambda \Sigma(\xi, \lambda) \Sigma(x, \lambda)$$

と書ける。(1.7) の逆は $z = x \circ (2)$, $\partial_x f(x, \lambda) =$

$\lambda f(x, \lambda)^2$ である。 $z = z'$ $z(x, \lambda) = f(x, \lambda)^{-1} \in A[[\lambda]]$ とお

くと $\partial_x z(x, \lambda) = -\lambda$ であり, $z(x, \lambda) = z(\lambda) - x\lambda$, したが

$z(\lambda) = 1 - \sum_{i=1}^{\infty} z_i \lambda^i$ ($z_i \in k$) と表わされる。 最も簡単な,

命題 1. A の monic の多項式の系列 $(e_i)_{i=0}^{\infty}$ ($\deg e_i = i$)

が F -系列である必要 + 十分条件は, k の元の系列 $(z_i)_{i=1}^{\infty}$

による。

$$e_i(x) = (z(\lambda) - x\lambda)^{-1} \text{ の } \lambda^i \text{ の係数}$$

と表わせることである。

F -系列は, 上の $(z_i)_{i=0}^{\infty}$ が k の x -タプルである。 $(z_i)_{i=1}^{\infty}$

が "flat coordinate system" と呼ばれる。 $(z_i)_{i=1}^{\infty}$

であるが, 本節以降は両定式化する。

□ 2. F -系列と命数体の構造 以下, k は可換体の代数。

定義 2. $A = k[[x]]$ の元の系列 $(F_i)_{i=0}^{\infty}$ が,

F0) F_i は, i 次 monic

F1) $i \leq j$ に対して, $\frac{1}{i} \partial_x(F_i)F_j - \frac{1}{j} \partial_x(F_j)F_i$ は,

高々 $(j-2)$ 次

という 2 条件を満たすとき, F -系列 であるという。

R は条件 F1) は, $i \leq j$ に対して,

$$(2.1) \quad \frac{1}{i} F_i^{-1} \partial_x(F_i) \equiv \frac{1}{j} F_j^{-1} \partial_x(F_j) \pmod{R(-i-2)}$$

と表わされるから, $F_i \stackrel{v_i}{\equiv} F_j \pmod{R(-i)}$ と書ける。

$$(2.2) \quad \zeta = \lim_{i \rightarrow \infty} \zeta_i^{1/i}; \quad \zeta \equiv \zeta_i^{1/i} \pmod{\mathbb{R}(i)}$$

この極限と12, 1次のmonic多項式 $\zeta, x + \zeta_1 + \zeta_2 x^{-1} + \dots$ が定まる。

命題2, \mathbb{F} -系列 $(F_i)_{i=0}^{\infty}$ と, 1次monic多項式 ζ とは

$$F_i(x) = \zeta(x)_+^i$$

に ζ, ζ , 1対1に対応する。

12の1次monic多項式 ζ は,

$$(2.3) \quad \zeta = x + \sum_{i=1}^{\infty} \zeta_i x^{1-i} \quad (\zeta_i \in k)$$

と展開すると, 上の命題は, \mathbb{F} -系列が k の ζ の系列 $(\zeta_i)_{i=1}^{\infty}$ に ζ, ζ 1107 x -タグ (12) である ζ と主張1213。系列 $F_i = (\zeta^i)_+$ から,

命題3, \mathbb{F} -系列 $(F_i)_{i=1}^{\infty}$, derivation $\theta: k \rightarrow k$ ζ, ζ 12, $i \leq j$ に対し, 多項式 $\theta(F_i) \partial_x(F_j) - \theta(F_j) \partial_x(F_i)$ は高々 $(j-2)$ 次。

が, 従う。また, ζ -系列との関係は, ζ の通りである。

(2.3) の ζ について,

$$(2.4) \quad e_i = (\zeta^i \partial_x(\zeta))_+ = \frac{1}{i+1} \partial_x(F_{i+1}) \quad (i \geq 0)$$

と表わす。 $0 \leq i, j \leq k$ の ζ 2", $e_i e_j e_k^{-1} \equiv \zeta^{i+j-k} \partial_x(\zeta)$ mod. $\mathbb{R}(-2)$ の ζ ,

$$\text{Res}_{\mathbb{R}/k} \left(\frac{e_i e_j dx}{e_k} \right) = \text{Res}_{\mathbb{R}/k} \left(\zeta^{i+j-k} d\zeta \right) = \delta_{i+j-k, -1}$$

と11), $(e_i)_{i=0}^{\infty}$ は \mathbb{F} -系列 ζ の ζ 。

命題 4. F -系列 $(e_i)_{i=0}^{\infty}$ と, 1次 monic 0級数 f とは, (2.4) (γ, δ) 1対1に対応する。

⇐ 1, 2, 1次 monic 0級数 f と, F -系列 $(f_i)_{i=1}^{\infty}$, E -系列 $(e_i)_{i=0}^{\infty}$ とは, 互いに同値の対象であることが判る。

□ 3. $f(x)$ の反転. 1次 monic 0級数

$$(3.1) \quad f(x) = x + \sum_{i=1}^{\infty} s_i x^{1-i} \in k((x^{-1})) \quad (s_i \in k)$$

1対1 2, 1D級数

$$(3.2) \quad g(y) = y - \sum_{i=1}^{\infty} z_i y^{1-i} \in k((y^{-1})) \quad (z_i \in k)$$

と, f の逆として定まる。

$$(3.3) \quad (g \circ f)(x) = x \quad (f \circ g)(y) = y$$

より, $g(y)$ は R の生成元として, $y = f(x)$ とし, x を y の級数として解くことも可能。この意味で $R = k((x^{-1})) = k((y^{-1}))$ 。

上の関係で, $(s_i)_{i=1}^{\infty}$ から決まる $(z_i)_{i=1}^{\infty}$ は, f に付随する F -系列, E -系列を調べる上で重要な役割をもつ。各 $z_i \in k$ は,

s_j ($1 \leq j \leq i$) の多項式として定まる。 $z_1 = s_1$, $i \geq 2$ とは,

$$\begin{aligned} z_i &= -(\text{g(y) の } y^{1-i} \text{ の係数}) = -\text{Res}_{R/k} (y^{i-2} g(y) dy) \\ &= -\text{Res}_{R/k} (f(x)^{i-2} x df(x)) = -\frac{1}{i-1} \text{Res}_{R/k} (x df(x)^{i-1}) \\ &= \frac{1}{i-1} \text{Res}_{R/k} (f(x)^{i-1} dx) \end{aligned}$$

母函数 $S(\lambda) = 1 + \sum_{i=1}^{\infty} s_i \lambda^i \in k[[\lambda]]$ を用いると, $f(x) = x S(x^{-1})$ 。

から, $z_i = \frac{1}{i-1} S(\lambda)^{i-1} \Big|_{\lambda^{-1}} = \frac{1}{i-1} S(\lambda)^{i-1}$ の λ^i の係数。(以後 λ の1D級数 $\Phi(\lambda)$ の λ^i の係数を $\Phi(\lambda)_i$ と記す。) ⇐ 1, 2,

命題 ζ 上の記号の F は, $\zeta_i = z_i$, $i \geq 2$ に対し,

$$\left\{ \begin{aligned} \zeta_1 &= \frac{1}{i-1} \operatorname{Res}_{\zeta/k} (\zeta(x)^{i-1} dx) = \frac{1}{i-1} \zeta(\lambda)_i^{i-1} \\ \zeta_1' &= \frac{-1}{i-1} \operatorname{Res}_{\zeta/k} (g(y)^{i-1} dy) = \frac{-1}{i-1} z(\lambda)_i^{i-1} \end{aligned} \right.$$

$$\zeta \ni z'' \text{, } \zeta(\lambda) = 1 + \sum_{i=1}^{\infty} \zeta_i \lambda^i \text{, } z(\lambda) = 1 - \sum_{i=1}^{\infty} z_i \lambda^i \text{.}$$

次に, ζ に附随する F -系列 $(F_i)_{i=1}^{\infty}$, E -系列 $(e_i)_{i=0}^{\infty}$, $(z_i)_{i=1}^{\infty}$

を用いて表わす。不定変数 λ を添加し, $\zeta = k((\lambda^{-1})) z''$,

$$\begin{aligned} F_i(x) &= \zeta(x)^i = \operatorname{Res}_{\zeta/k} \left(\frac{\zeta(\xi)^i}{\xi - x} d\xi \right) \\ &= \operatorname{Res}_{\zeta/k} \left(\frac{\eta^i \partial_{\eta} g(\eta) d\eta}{g(\eta) - x} \right) = \left(\frac{\eta \partial_{\eta} g(\eta)}{g(\eta) - x} \right) \text{ の } \eta^{-i} \text{ の係数} \end{aligned}$$

ζ , $i \geq 1$ である。(変数変換 $\xi = g(\eta)$ を用いる。) $g(\eta) =$

$\eta z(\eta^{-1})$ の z'' , 母函数 $z(\lambda)$ であり,

$$\begin{aligned} F_i(x) &= \left[\frac{-\lambda \partial_{\lambda} (z(\lambda) - x\lambda)}{z(\lambda) - x\lambda} \right]_i \\ &= -\lambda \partial_{\lambda} \log(z(\lambda) - x\lambda)_i \text{.} \end{aligned}$$

$\zeta \ni z''$, 新たに母函数

$$F(x, \lambda) = \sum_{i=1}^{\infty} F_i(x) \lambda^i \in k[x][[\lambda]]$$

を算することができる。下記の定理を得る。

定理 1. 1次 monic 多項式 $\zeta \in k((\lambda^{-1}))$ について, $(z_i)_{i=1}^{\infty}$ は

上記の組(i)に属する。 ζ の附随する F -系列 $(F_i)_{i=1}^{\infty}$,

E -系列 $(e_i)_{i=0}^{\infty}$ は, 母函数の間の関係式として,

i) $F(x, \lambda) = -\lambda \partial_{\lambda} \log |z(\lambda) - x\lambda|$

ii) $E(x, \lambda) = (z(\lambda) - x\lambda)^{-1}$

と表現される。

$\partial_x(F_i) = i e_{i-1}$ ($i \geq 1$) に注意すれば、ii) は i) から従う。
 この ii) は、命題 1 のパラメータづけに別の意味を与えるもの
 がある。この項の終わりに、具体計算に役立つ、命題 5 の
 敷衍する反転公式を与える。

命題 6 任意の $i, j \in \mathbb{Z}$ について、

$$\frac{1}{i} S(\lambda)_{i+j}^i = \frac{-1}{j} Z(\lambda)_{i+j}^j$$

 が成り立つ。

□ 4. flat coordinate system. 前項の $s = (s_i)_{i=1}^{\infty}$ を
 “座標系” と考え、 k とした可算変数の多項式環 $\mathbb{Q}[s] =$
 $\mathbb{Q}[s_1, s_2, \dots]$ をとる。(3.1) の ζ とし、対応する $z_i \in \mathbb{Q}[s]$
 ($i \geq 1$) を考える。 $s = (s_i)_{i=1}^{\infty}$ の多項式 $z_i = z_i(s)$ は、
 (4.1) $z_i(0) = 0, \quad \frac{\partial z_i}{\partial s_j} = \delta_{ij}$ ($i \leq j$)
 を満たすものとして、 $z = (z_i)_{i=1}^{\infty}$ は、 $k = \mathbb{Q}[s]$ の代数的に独立な生成
 系を与える。この意味で、 $z = (z_i)_{i=1}^{\infty}$ と $s = (s_i)_{i=1}^{\infty}$ に伴って、
 flat coordinate system という、($k = \mathbb{Q}[s] = \mathbb{Q}[z]$)
 のとき、 ζ に伴って F-系列 $(F_i)_{i=1}^{\infty}$ 、E-系列 $(e_i)_{i=1}^{\infty}$ につ
 いて、

$$(4.2) \quad \partial_{z_i}(F_j) = \delta_{i-j} \quad (i, j \geq 1, \quad i < 0 \text{ の } e_i = 0)$$

と成り立つことが判る。一般に、 $k = \mathbb{Q}[s]$ の代数的に独立な、
 \mathbb{Q} -代数の生成系を、座標と呼べば、7.3 の定理が成り立つ

定理 2. $s = (s_i)_{i=1}^{\infty}$ に伴う flat coordinate system $z = (z_i)_{i=1}^{\infty}$ は, (4.1) (4.2) を満たす唯一の $k = \mathbb{Q}[s]$ の座標と一致し, 特徴づけられる。

A 型 Gauss-Manin 系の flat coordinate system は, 以下の様子, $(z_i)_{i=1}^{\infty}$ を "reduo" して得られる。これは同様に, $t = (t_2, \dots, t_q)$ を変数とする多項式環 $k, \mathbb{Q}[t] = \mathbb{Q}[t_2, \dots, t_q]$ 上, Q 次多項式

$$(4.3) \quad F = x^Q + t_2 x^{Q-2} + \dots + t_q \in k[x]$$

を考える。 $k((x^{-1}))$ 上, (4.3) の分数中

$$(4.4) \quad \zeta = F^{1/Q} = x + s_2 x^{-1} + s_3 x^{-2} + \dots$$

をとり, ζ が z と一致し, ζ に付随する F -系列 $(F_i)_{i=1}^{\infty}$, E -系列 $(e_i)_{i=0}^{\infty}$ 及び $(z_i)_{i=1}^{\infty}$ を得ることは可能である。このとき,

$$(4.5) \quad F_i = (F^{1/2})_+, \\ e_i = \frac{1}{i+1} \partial_x (F^{1/2})_+ = \frac{1}{i+1} \partial_x (F_{i+1})$$

と $i < Q$, $F_0 = F$, $e_{Q-1} = \frac{1}{2} \partial_x (F)$ である。特に, $z_1 = 0$,

$$(4.6) \quad z_i = \frac{1}{i-1} \operatorname{Res}_{k((x^{-1}))} (F^{1/2}) (i \geq 2)$$

で, $\frac{\partial z_i}{\partial t_j} = \delta_{ij}$ ($i \leq j$) が判る。従って, (z_2, \dots, z_q) は

$k = \mathbb{Q}[t]$ の新たな座標と一致する。 ($i > Q$

について, z_i は (z_2, \dots, z_q) の多項式である。) このとき,

定理 2 に対応して,

$$(4.7) \quad \partial_{z_i} (F) = Q e_{Q-i} \quad (2 \leq i \leq Q)$$

が成り立つ。通常, Jacobi行列式が λ^i となる(すなわち, $y_i = \ell z_i$ ($2 \leq i \leq \ell$)) とおいて, $y = (y_2, \dots, y_\ell) \in \mathbb{C}^{\ell-1}$, $t = (t_2, \dots, t_\ell)$ とおくと $A_{\ell-1}$ 型 flat coordinate system と呼ばれる。 (すなわち, K. Saito, T. Yano, J. Sekiguchi [5] の意味の, $A_{\ell-1}$ 型 "flat generator system" に一致する。) の flat coordinate system $y = (y_2, \dots, y_\ell)$ を用いて,

$$(4.8) \quad \begin{cases} F = -\ell \log \left(1 - \frac{1}{\ell} \sum_{i=2}^{\ell} y_i \lambda^{i-1} \right) \\ e_i = \partial_{y_{\ell-i}}(F) = \left(1 - \frac{1}{\ell} \sum_{i=2}^{\ell} y_i \lambda^{i-1} \right)^{-1} \end{cases} \quad (0 \leq i \leq \ell)$$

が, 定理 1 から従う。まず, (4.7) は,

$$(4.9) \quad \partial_{y_i}(F) = e_{\ell-i} \quad (2 \leq i \leq \ell)$$

に代わる。座標 $t = (t_2, \dots, t_\ell)$ と $y = (y_2, \dots, y_\ell)$ の間の変換公式は, $S(\lambda) = \left(1 + \sum_{i=2}^{\ell} t_i \lambda^i \right)^{1/\ell}$ と, 媒介変数 λ (2, 命題 6 (5)) の計算から,

$$(4.10) \quad y_i = \frac{\ell}{i-1} \left(1 + \sum_{j=2}^{\ell} t_j \lambda^j \right)^{\frac{i-1}{\ell}} \quad (2 \leq i \leq \ell)$$

$$(4.11) \quad \begin{cases} t_i = \frac{-\ell}{i-2} \left(1 - \frac{1}{\ell} \sum_{j=2}^{\ell} y_j \lambda^{j-1} \right)^{i-2} \\ t_\ell = -\ell \log \left(1 - \frac{1}{\ell} \sum_{j=2}^{\ell} y_j \lambda^{j-1} \right) \end{cases} \quad (2 \leq i \leq \ell-1)$$

と得る。

第3節. A型 Gauss-Manin系の構造

この節では、1節の議論を A型 Gauss-Manin系の場合に具体化し、2節で示した公式(1.8)より、A型 Gauss-Manin系の幾何的表示式を与える。

□1. A型 Gauss-Manin系の flat basis, flat coordinate system. A_{q-1} 型孤立特異点を持つ多項式 x^q ($q \geq 2$) の versal 変形

$$(1.1) \quad F(x, t) = x^q + t_2 x^{q-2} + \dots + t_q \quad t = (t_2 \dots t_q)$$

の Gauss-Manin系 H_F を考察する。 $t' = (t_2 \dots t_{q-1})$ とおき、座標 (x, t') (または t, t') をとり、 \mathbb{A}^q 空間を、 $X(S, T)$ で表わす。 $F_1(x, t') = F(x, t) - t_q$ とおくと普遍開折

$$(1.2) \quad \varphi: X \rightarrow S, \quad \varphi(x, t') = (t', -F_1(x, t'))$$

についての、De Rham系 \mathcal{O}_X の積分として定まる \mathbb{Z}_q -加群がある。 Gauss-Manin系である。第1節と同様、 $T^*S \ni (0, dt_q)$ の芽、を考察することになる。 $\mathcal{O}_X = \mathbb{C}\langle x, t' \rangle$, $\mathcal{O}_S = \mathbb{C}\langle t' \rangle$ 、といて、 F_1 記法も同様である。 F の versality から、階数 $(q-1)$ の3つの \mathcal{O}_T -自由加群

$$\mathcal{G} = \{ \theta \in D_{\mathbb{R}^n} : \int \eta_{\theta} \cdot \theta = 0 \}$$

$$(1.3) \quad \begin{aligned} \Omega_F &= \Omega'_{X/T} / dF_1 \wedge \Omega_X \xleftarrow{\sim} \Omega'_X \otimes_X (F) = \Omega_C \\ &H_F^{(0)} / H_F^{(-1)} \end{aligned}$$

の (1) の \mathcal{O}_T -同型

$$\begin{array}{ccc} \mathcal{G} & \xrightarrow{\sim} & \Omega_F \\ & \searrow & \downarrow \int \\ & & H_F^{(0)} / H_F^{(-1)} \end{array} \quad \theta \begin{array}{l} \nearrow \int \theta(F) dx \\ \searrow \int \theta D_{\mathbb{R}^n}^{-1} u \end{array}$$

がある。" \Leftarrow "。 $u = \int S(F(x, t)) dx$ は、simple holonomic system と (2) の H_F の標準的生成子である。

(2), (1) の同型は、 $\mathcal{G} = \mathcal{G} D_{\mathbb{R}^n}^{-1} \mathcal{G} D_{\mathbb{R}^n}^{-1}$ から $H_F^{(0)}$ への \mathcal{O}_T による同型 $\mathcal{G} \rightarrow \mathcal{G} u$ を誘導する。(1) 節を参照) この同型 $\mathcal{G} \xrightarrow{\sim} H_F^{(0)}$ を用いて、 \mathcal{G} 上に幾つかの演算が定義される。これを具体化する。鍵となるのは、図式

$$(1.4) \quad \begin{array}{ccccccc} & & & \mathcal{G} & & & \\ & & & \swarrow & \searrow & & \\ 0 & \rightarrow & \mathcal{O}_X \otimes_X (F) & \rightarrow & \mathcal{O}_X & \rightarrow & \Omega_F \rightarrow 0 \end{array}$$

である。 $\mathcal{G} \rightarrow \mathcal{O}_X$ は、 $\theta \mapsto \theta(F)$ によって \mathcal{O}_T -同型で、その像を $\mathcal{L} = \bigoplus_{i=0}^{r-2} \mathcal{O}_T x^i$ とおくと、 \mathcal{O}_T -直和分解 $\mathcal{O}_X = \mathcal{L} \oplus \mathcal{O}_X \otimes_X (F)$ を得る。 $a \in \mathcal{O}_X$ に対して、

$$(1.5) \quad a = r(a) + q(a) \otimes_X (F) \quad r(a) \in \mathcal{L}, \quad q(a) \in \mathcal{O}_X$$

とおくと、割算の一意性から、 \mathcal{O}_T -同型 $r: \mathcal{O}_X \rightarrow \mathcal{L}$, $q: \mathcal{O}_X \rightarrow \mathcal{O}_X \otimes_X (F)$ が定まる。 \mathcal{O}_T -同型 $\mathcal{G} \xrightarrow{\sim} \mathcal{L}$ を用いて、 \mathcal{G} 上の演算を、 \mathcal{L} の言葉に翻訳する。

- 命題 1. 上の記号の下で, $\theta, \theta' \in \mathcal{G}$ について,
- i) $(\iota_2 * \theta)(F) = -r(\theta(F)F_1), N(\theta)(F) = \partial_x \theta(\theta(F)F_1)$
 - ii) $(\theta * \theta')(F) = r(\theta(F)\theta'(F)), (\nabla_\theta \theta')(F) = \theta\theta'(F) - \partial_x \theta(\theta(F)\theta'(F))$
 - iii) $k \geq 2$ で, $A_k(\theta) = 0, B_k(\theta, \theta') = 0$.

iii) から, torsion free の接続 ∇ は, 積分可能で, N について, $[\nabla_\theta, N] = 0$ と成る. したがって, $\mathcal{D} = \mathcal{D}_\theta$ とおくと, $H_F^{(0)}$ での等式

$$(1.6) \quad \begin{cases} \iota_2 \theta D^{-1} u = (\iota_2 * \theta) D^{-1} u + N(\theta) D^{-2} u \\ \theta \theta' D^2 u = (\theta * \theta') D^{-1} u + \nabla_\theta \theta' \end{cases}$$

が, $\theta, \theta' \in \mathcal{G}$ について成り立つ. ∇ の積分可能性と torsion free ness から, S の座標系 $y = (y_2 \dots y_k)$ で flat 基底 δ^i と δ_i が, S の中では, 標準的基底 δ^i と δ_i を用いる.

\mathcal{O}_T -同型 $\mathcal{L} \rightarrow \mathcal{L}$ を通して, ∇ は \mathcal{L} の接続, N は \mathcal{L} の \mathcal{O}_T -同型と考える. $a \in \mathcal{L}, \theta \in \mathcal{G}$ について, $N(a) = \partial_x \theta(a(F))$

$\nabla_\theta a = \theta(a) - \partial_x(\theta(a(F)))$ とおけばよい. $L = \{ a \in \mathcal{L} : \nabla_\theta a = 0, \theta \in \mathcal{G} \}$ とおくと, flat 基底 $y = (y_2 \dots y_k)$ と, \mathcal{L} の \mathbb{C} -基底 (= \mathcal{L} の flat basis とおす) e_0, \dots, e_{k-2} とおき, $D_{y_i}(F) = e_{k-i}$ となる. (対 i に対応する). S 上で, \mathcal{L} の flat basis をつぎのようにならべる. $[\nabla_\theta, N] = 0$ ($\theta \in \mathcal{G}$) より, L は N -不変. \mathbb{C} -同型 $N: \mathcal{L} \rightarrow \mathcal{L}$ について,

補題 1, $N: L \rightarrow L$ は, $\frac{1}{q}, \dots, \frac{q-1}{q}$ を固有値とし,

その固有ベクトルからなる L の基底 e_0, \dots, e_{q-2} がある

$$N e_i = \frac{i+1}{q} e_i \quad e_i|_{t=0} = x^i \quad (0 \leq i \leq q-2)$$

とあるものが唯一つ存在する。

この条件で与えられる L の基底 e_0, \dots, e_{q-2} は標準的 flat

basis, $D y_i(F) = e_{q-i}$ が基底となる flat の座標系 ξ , 標準

的 flat coordinate system という。

補題 2, $a \in \mathcal{L}$, \mathbb{R}^n , $\lambda \in \mathbb{C}$ について,

i) $\forall \theta \ a = 0$ ($\forall \theta \in \mathcal{G}$) とあるのは, $a = \partial_x(b)$, $b \in$

$\mathcal{O}_T[x]$ である, $\partial_x(b)\theta(F) - \theta(b)\partial_x(F) \in \mathcal{L}$ とあるものが

存在するとは, そのときに限る。

ii) $N a = \lambda a$ とあるのは, $a = \partial_x(b)$, $b \in \mathcal{O}_T[x]$ である,

$\partial_x(b)F_1 - \lambda b \partial_x(F) \in \mathcal{L}$ とあるものが存在するとは,

そのときに限る。

このとき, 前節の議論を繰り返すと, $\xi = F^{1/q} \in \mathcal{O}_F(\bar{x})$

に付随した \mathcal{O}_F 上の ξ -基底 $(e_i)_{i=0}^{q-1}$ について, e_0, \dots, e_{q-2}

が, 標準的 flat basis を与え, 前節の y_2, \dots, y_q が

標準的 flat coordinate system を与えることが判る。

よってこの方程式系 H_F の極性が $\text{versality } \mathcal{G} \cong \mathcal{L} \cong \mathcal{O}_F$

である。よって \mathcal{O}_F の $\partial_x(F)$ に関する割算を繰り返して得られるとい

う観点から, \mathcal{O}_F の双対性も導くことができる。 $a, b \in \mathcal{O}_F$ とし,

(1.7) $\langle a, b \rangle = \mathcal{Q} \operatorname{Res}_{X/T} \left(\frac{ab dx}{\partial_x(F)} \right) = \frac{\mathcal{Q}}{2\pi\sqrt{-1}} \int_{\gamma(t)} \frac{ab dx}{\partial_x(F)} \in \mathcal{Q}_T$
 とおく。 ($\mathcal{Q} = 2$, $\gamma(t)$ は $\{x \in \mathbb{C}; \partial_x F_1(x, t) = 0\}$ の cycle がある。) $\langle \cdot, \cdot \rangle$ は 同式 (1.4) に 8.11 Ω_F 上の perfect pairing を誘導する。(Serre duality).
 この \mathcal{Q}_T -双-線形式 $\langle \cdot, \cdot \rangle: \Omega_F \times \Omega_F \rightarrow \mathcal{Q}_T$ と、与えられた L 上の 微算 $\nabla: N$ との関係は、下記の通り。($a \in \mathcal{Q}_T[x]$ ならば、 $\operatorname{Res}_{X/T} \left(\frac{a dx}{\partial_x(F)} \right)$ と、第 2 節、0 の意味の $\operatorname{Res}_{\mathcal{Q}_T((x))} / \mathcal{Q}_T \left(\frac{a dx}{\partial_x(F)} \right)$ と一致する。)

命題 2. $a, b \in L$ について、

i) $\langle \nabla_\theta a, b \rangle + \langle a, \nabla_\theta b \rangle = \theta \langle a, b \rangle \quad (\theta \in \mathfrak{g})$
 ii) $\langle Na, b \rangle + \langle a, Nb \rangle = \langle a, b \rangle$

i) から、双-線形式 $\langle \cdot, \cdot \rangle$ は L 上 \mathbb{C} -値 と する ことが 従う。 ii) から、標準的 flat basis e_0, \dots, e_{q-2} については、直交関係

$$(1.8) \quad \langle e_i, e_j \rangle = \delta_{i, q-2-j}$$

が 成り立つ。 e_0, \dots, e_{q-2} の 自己双対性が判るのがある。 したがって、 \mathcal{O}_X 上の $\partial_x(F)$ による 割算 について、 $a \in \mathcal{O}_X$ ならば $r(a)$ が

$$(1.9) \quad r(a) = \sum_{j=0}^{q-2} \langle a, e_{q-2-j} \rangle e_j \\ = \mathcal{Q} \sum_{j=0}^{q-2} \operatorname{Res}_{X/T} \left(\frac{a e_{q-2-j} dx}{\partial_x(F)} \right) e_j$$

と 与えられることに注意しておく。

□ 2. Gauss-Manin系 H_F の (A, B) -表示 Gauss-

Maurin系 H_F の表示式 (1.6) を, 標準的 flat basis e_0, \dots, e_{q-2} と flat coordinate system $y = (y_2, \dots, y_q)$ を用いて具体化する。 $H_F^{(0)}$ の $O_T \cong D^{-1}$ 基底 u_0, \dots, u_{q-2} と τ の $\tau \rightarrow \gamma$ とする。

(2.1) $u_i' = D_{y_{q-i}} D_{y_q}^{-1} \int \delta(F) dx = \int e_i \delta(F) dx \quad (0 \leq i \leq q-2)$
 $D = D_{y_q} = D_{t_q}, \quad w(\theta) = t_q \theta - t_q * \theta = y_q \theta - y_q * \theta$ である。

(2.2) $\left\{ \begin{aligned} y_q \theta D_{y_q}^{-1} u &= (y_q * \theta) D_{y_q}^{-1} u + N(\theta) D_{y_q}^{-2} u \\ \theta \theta' D_{y_q}^{-2} u &= (\theta * \theta') D_{y_q}^{-1} u + (\nabla_{\theta} \theta') D_{y_q}^{-2} u \end{aligned} \right.$
 $(\theta, \theta' \in \mathcal{F})$

を得る。 \mathcal{F} の基底 D_{y_q}, \dots, D_{y_2} に対応 $(\mathcal{L}, \mathcal{L})$ の基底 e_0, \dots, e_{q-2} とし, $\vec{e} = {}^t(e_0, \dots, e_{q-2})$ かつ $y_q * \vec{e} = A_0 \vec{e}, N \vec{e} = A_1 \vec{e}, D_{y_q} * \vec{e} = B^{(q)} \vec{e}$, \vec{e} の直交性?

(2.3) $\left\{ \begin{aligned} A_1 &= \text{diag} \left(\frac{1}{2}, \frac{2}{2}, \dots, \frac{q-1}{2} \right) \\ A_0 &= (A_{0,ij})_{0 \leq i,j \leq q-2} \quad A_{0,ij} = -2 \int \frac{(y_q - y_i) e_i e_{q-2-j} dx}{\partial_x(F)} \\ B^{(q)} &= (B^{(q)}_{ij})_{0 \leq i,j \leq q-2} \quad B^{(q)}_{ij} = 2 \int \frac{(e_{q-2} - e_i) e_j e_{q-2-j} dx}{\partial_x(F)} \end{aligned} \right.$

が判る。

定理 1. Gauss-Manin系 H_F の flat coordinate system $y = (y_2, \dots, y_q)$ かつ (2.1) の $\vec{e} = {}^t(u_0, \dots, u_{q-2})$ の方程式系 (2.3) の $A_0, B^{(q)} \in$

$\in M(Q-1, \mathbb{C}_T)$. $A_1 \in M(Q-1, \mathbb{C})$ を用いて,

$$\begin{cases} y_0 \vec{u} = A_0 \vec{u} + A_1 D_{y_0}^{-1} \vec{u} \\ D_{y_k} D_{y_0}^{-1} \vec{u} = B^{(k)} \vec{u} \quad (2 \leq k \leq Q-1) \end{cases}$$

と表示される。

標準化された flat coordinate system を用いて結果,

$B^{(k)}$ が函数行列, A_1 が対角化された定数行列 (0), であり Ω_F の duality の反映と一致, 行列 $A_0, B^{(k)}$ が反対称線形かつ対称となる。また, 定理 1 の方程式系の compatibility から, 次の命題を得る。

$$\left[\begin{array}{l} \text{命題 3. i) } [B^{(k)}, A_0] = 0 \quad (k=2, \dots, Q-1) \\ \text{ii) } [B^{(k)}, A_1] - B^{(k)} = \partial_{y_k}(A_0) \quad (k=2, \dots, Q-1) \end{array} \right.$$

定理 1 の行列の具体計算を進行するには, 本質的には,

residue

$$(2.4) \quad Q \operatorname{Res} \left(\frac{F e_i e_j dx}{\partial_x(F)} \right) \quad (0 \leq i, j \leq Q-2)$$

を決定すればよい。巾級数環 $\mathbb{C}_s((x^{-1}))$ で函数 $f = F^{1/Q}$ をと

$$\begin{aligned} & 1). \quad f \text{ の各値ある } E\text{-系列 } (e_i)_{i=0}^{\infty} \text{ をとる。} \\ & Q \operatorname{Res} \left(\frac{F e_i e_j dx}{\partial_x(F)} \right) \\ & = \operatorname{Res} \left(\frac{f e_i e_j dx}{\partial_x(f)} \right) \text{ に注意して, 次の母函数を考へる。} \\ & E(\lambda) = \sum_{i=0}^{\infty} e_i \lambda^i \text{ とおくと,} \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} (2.5) \quad & \operatorname{Res} (E(\lambda) E(\mu) f \partial_x(f)^{-1} dx) \\ & = \sum_{i, j \geq 0} \operatorname{Res} (e_i e_j f \partial_x(f)^{-1} dx) \lambda^i \mu^j \end{aligned}$$

2節の結果から, (2.7) $i=2$ を用いて, $E(\lambda)^{-1} = \lambda(\lambda) - \lambda \lambda$,

$z(\lambda) = 1 - \sum_{i=2}^{\infty} z_i \lambda^i$ と表わせば,

$$\text{命題 4} \quad \text{Res} \left(\frac{E(\lambda)E(\mu)F d\lambda}{\partial_x(F)} \right) = \frac{\partial_\lambda z(\lambda) - \partial_\mu z(\mu)}{\mu z(\lambda) - \lambda z(\mu)}$$

が、成り立つ。この表すは、

$$(2.6) \quad \lambda \mu \text{Res} \left(\frac{E(\lambda)E(\mu)F d\lambda}{\partial_x(F)} \right) \\ = (\lambda \partial_\lambda + \mu \partial_\mu) \log \left(1 + \sum_{i=2}^{\infty} z_i (\lambda^{i-1} \mu + \dots + \lambda \mu^{i-1}) \right)$$

と書かれる。

この母函数を用いて (2.4) を計算すると、(2.6) の右辺を

$\lambda^i \mu^j$ の係数を $\Lambda(i, j)$ と書けば、 $0 \leq i, j \leq \ell - 2$ のとき、

$$(2.7) \quad \ell \text{Res} \left(\frac{e^i e^j F d\lambda}{\partial_x(F)} \right) = \Lambda(i+1, j+1) - \Lambda(i+j+2-\ell, \ell)$$

と成る。

□3. 対数的バクトル場と discriminant の満たす方程式

第1節の議論に於て、 $w(\theta) = t_\ell \theta - t_0 * \theta = y_\ell \theta - y_0 * \theta$

が定する \mathbb{Q}_5 -準同型 $w: \text{Der}_{\mathbb{Q}_5} \rightarrow \text{Der}_{\mathbb{Q}_5}$ は、discriminant D

に於て対数的バクトル場の全体 $\text{Der}_{\mathbb{Q}_5}(\log D)$ 上の \wedge の同

型を与える。 $\text{Der}_{\mathbb{Q}_5}$ の \mathbb{O}_5 -基底 $D_{y_\ell}, \dots, D_{y_2}$ についての w の

行列表示は、(2.3) の行列を用いて、 $R = : y_\ell I - A_0$ と与え

られる。 $\varepsilon = 2$ 、

$$(3.1) \quad \theta_k = w(D_{y_k}) \quad (2 \leq k \leq \ell) \quad t(\theta_2, \dots, \theta_\ell) = R^t(D_{y_2}, \dots, D_{y_\ell})$$

とおくと、 $\theta_2, \dots, \theta_\ell$ は、 $\text{Der}_{\mathbb{Q}_5}(\log D)$ の \mathbb{Q}_5 -自由基底となる。

この場合、 $\Delta = \det(w) = \det(R)$ は、 $F = x^\ell + t_2 x^{\ell-2} +$

$\dots + t_\ell$ の判別式がある。表示式 (2.2) から、 $w, *$ の関係

式を用いて, Gauss, Main 系 H_F の, 対数的なベクトル場 $\theta_0, \dots, \theta_2$ に関する表示式を得る。

定理 2. 上の記号の下で, H_F において,

$$\theta_k \vec{u} = B^{(k)}(A_1 - I) \vec{u} \quad (2 \leq k \leq \ell)$$
 が成立する。

$w: \text{Den}_\zeta \rightarrow \text{Den}_\zeta$ を用いると, discriminant Δ について,

$$(3.3) \quad w(\theta) \Delta = \theta(\text{tn}(w)) \Delta, \quad (\theta \in \text{Den}_\zeta)$$

が成り立つことは, w によって示される。 $\text{tn}(w) = \text{tn}(R)$ による。
 flat basis に関する (2. $\partial_x F(\lambda) = \lambda F(\lambda)^2$, 参照)

$$(3.4) \quad \sum_{i=0}^{\ell-2} e_i e_{\ell-2-i} = \frac{1}{\ell} \partial_x^2(F)$$

ゆえ, 命題 4 から,

$$\begin{aligned} \text{命題 5} \quad \text{tn}(w) &= \text{Res} \left(\frac{F \partial_x^2(F) dx}{\partial_x(F)} \right) \\ &= \ell \log \left(1 + \sum_{i=2}^{\ell} \frac{i-1}{\ell} y_i \lambda^i \right) \end{aligned}$$

$$\tau = \text{tn}(w) = \text{tn}(R) \text{ と } \tau \text{ である。}$$

定理 3. $\text{Den}_\zeta(\log D) \cap \mathcal{O}_\zeta$ -基底 $\theta_0, \dots, \theta_2$ ($\theta_k = w(\mathcal{D}_{y_k})$)
 について,

$$\theta_k(\Delta) = \partial_{y_k}(\tau) \Delta \quad (2 \leq k \leq \ell)$$

$$\partial_{y_k}(\tau) = (k-1) \left(1 + \sum_{i=2}^{\ell} \frac{i-1}{\ell} y_i \lambda^i \right)^{-1}_{\ell-k} \quad (2 \leq k \leq \ell)$$

が成立する。

文献

- [1] Ishiura, S. and Noumi, M. : A calculus of the Gauss
-Manin system of type A_e . I, II. Proc. Japan Acad.
Vol. 58, No.1, 13-16, No.2, 62-65, (1982).
- [2] Pham, F. : Singularités des systèmes différentiels de
Gauss-Manin, Birkhäuser, (1979).
- [3] Saito, K. : Primitive forms for a universal unfolding
of a function with an isolated critical point.
(RIMS. preprint).
- [4] Saito, K. : On a linear structure of a quotient
variety by a finite reflexion group. (RIMS. preprint)
- [5] Saito, K., Yano, T. and Sekiguchi, J. : On a certain
generator system of the ring of invariants of a
finite reflection group. Comm. in Algebra, 8,
373 - 408 (1980).